

やくし」の頸部の所で断裂して遊離した光輝細胞が生ずるのを認める。

#### 第27例 樋木（発病後30日目）（十）

鬱血は可成り強いがその他實質の變化は餘り強くない。脾柱内外に中等数の光輝細胞を認める。ある部では脾柱の一端に數箇の光輝細胞が群在して脾柱深部のものは細長くて未だ筋纖維の性状が残つて居るが實質に近づくに従つて細胞周囲の間隙が廣くなり胞體も橢圓形又は強い偽足狀の突起を持つた光輝細胞に移行して居るのを認める。

#### 總括及び結論

脾臓では健康時には光輝細胞を全く認めない。又日常吾々が取扱ふ他の疾患でも殆んど之を認めない。『但、骨髓性白血病の1例に於て認められた事がある。（後報）』従つて前記した脾柱及び脾被膜で検出された光輝細胞は明かに腸チフスに罹つた事が直接の發生原因であると斷言出来る。光輝細胞の發生過程を追及すると先づ一定の脾柱滑平筋纖維が周圍組織との間に狭い間隙が出来て遊離を起す。遊離は兩端同時に起る事は少く先づ一端が遊離する爲にその側は短縮して太くなり筋纖維は「おたまじやくし」形になる。その頭部に相當して核が位置する。次で他の一端が遊離して定型的の光輝細胞となるのであるがその場合萎縮した筋纖維は断裂される事が多

い。出来上つた光輝細胞は更に核の直接分裂によつて増殖する事も出来る。チフス罹患の際最も早く動員されるのは脾柱邊緣部の滑平筋纖維であつて、光輝細胞の増殖の著しい場合には之等が集つて丘狀をなして脾柱の周圍に盛り上つて見える事がある。又脾柱動脈の外膜と脾柱組織の境にも同様の所見が現はれる。脾柱の内部では光輝細胞は餘り多數に發生しないが、此の部では他種遊走細胞を全く交へずに出現し得るから光輝細胞の研究に甚だ快適である。更に脾柱動脈の中膜に於ては前記所見が甚だ著しい。勿論脾柱内に炎症性の浸潤があるが光輝細胞の發生は最も盛んであつてひどい場合には滑平筋纖維の大多數が動員されて脾柱組織は崩滅に頻し多數の光輝細胞が發生を見る事がある。而しこんな場合には光輝細胞は腫大して非定型的となつて鑑別が困難である。注意すべき事は此の様な場合でも脾の光輝細胞は腹壁での様に定型的のチフス細胞に變るものを認め得ない事である。脾被膜には炎症性の浸潤を伴はずして光輝細胞の發生を見る事は甚だ稀である。尙光輝細胞は脾實質内に形成されるチフス結節の構成には關與しない。

擧筆するに當り親しく御指導御校閲を賜つた恩師濱崎教授に深甚の謝意を表する。

#### 主要文献

（第4篇参照のこと）

## 腸チフス屍の諸臓器に於ける光輝細胞の消長に就て

### 第3篇 肝臓及び脾臓の光輝細胞

岡山醫科大學病理學教室（指導 濱崎教授）

専攻生 岸 本 正 義

（昭和24年5月18日受稿）

#### 第1章 肝臓の光輝細胞

肝臓は光輝細胞に甚だ縁の薄い臓器であつて正常味には肝門部結締織中に後腹膜下組織

に屬すると考へられる光輝細胞が認められるのみである。<sup>5)</sup>チフス屍肝臓に於ける光輝細胞検出成績は次の通りである。

## 實驗成績

- 第1例 米田 (發病後6日目)(+)  
チフス結節を多數に認める。太い間質の動脈脈壁一部粗糙化してその滑平筋纖維から極く少數の光輝細胞が發生するのを認める。
- 第2例 西村。(發病後12日目)(±)  
チフス結節は認められない。動脈壁が粗糙化して個々の筋纖維が周圍の組織より分離し幾分短縮して光線を強く屈折するものを認め、たが定型的の光輝細胞は見出し得なかつた。
- 第3例 山口 (發病後13日目)(-)  
少數のチフス結節を認める。
- 第4例 深田 (發病後14日目)(+)  
實質の溷濁腫脹が甚だ著明である。大きな血管の中膜は粗糙化して極く少數の光輝細胞が發生して居る。
- 第5例 熊田 (發病後16日目)(-)  
實質の溷濁腫脹可成り著明である。光輝細胞は認めない。
- 第6例 丸尾 (發病後17日目)(-)  
少數のチフス結節を認める。光輝細胞は認めない。
- 第7例 山本 (發病後18日目)(-)  
實質の溷濁腫脹が著明である。光輝細胞は認め得ない。
- 第8例 籾山 (發病後18日目)(-)  
前例に類する。
- 第9例 漆岡 (發病後18日目)(+)  
極く少數の小さいチフス結節を認める。太い肝動脈の中膜は粗糙化して少數の光輝細胞が發生しつつある。
- 第10例 小檜山 (發病後19日目)(+)  
實質には不明瞭なチフス結節を少數に認め、尙瀰漫性の脂肪化がある。太い門脈壁に少數の光輝細胞の發生を認める。
- 第11例 渡邊 (發病後19日目)(-)  
實質の變性は餘り強くない。光輝細胞は認めない。
- 第12例 森木 (發病後19日目)(-)  
前例に類する。
- 第13例 鈴木 (發病後19日目)(-)  
小さいチフス結節を認める。光輝細胞を見

出し得ない。

- 第14例 春本 (發病後20日目)(-)  
實質に中等度の溷濁腫脹を認める。光輝細胞の定型的なものを認めない。
- 第15例 鷹森 (發病後21日目)(-)  
前例に類する。
- 第16例 河野 (發病後21日目)(-)  
實質の變化は中等度に認められる。光輝細胞は檢出されない。
- 第17例 稻毛 (發病後22日目)(+)  
實質の變化は左程強くない。太い門脈壁の滑平筋纖維が短縮して光輝細胞になるのが見られた。
- 第18例 山田 (發病後25日目)(+)  
少數のチフス結節を散見する。中等大の肝動脈中膜組織は粗糙化して筋纖維の一部のものは光輝細胞を形成しつつある。
- 第19例 村上 (發病後27日目)(-)  
實質の溷濁腫脹稍著明である。光輝細胞を認め得ない。
- 第20例 福井 (發病後30日目)(-)  
實質の變性比較的弱い。光輝細胞は認め得ない。
- 第21例 三浦 (發病後35日目)(+)  
實質の變性及び鬱血稍強い。太い靜脈壁に極く少數の光輝細胞を認める。
- 第22例 古川 (發病後日數不詳)(+)  
實質に不明瞭なチフス結節を認める。
- 第23例 長谷川 (發病後日數不詳)(+)  
實質の變性は比較的輕度であるが、太い動脈及び靜脈の中膜に比較的多數の光輝細胞が發生して居る。
- 第24例 冷水 (發病後日數不詳)(-)  
實質の變性は比較的輕度である。光輝細胞を認め得ない。
- 第25例 大野 (發病後37日目)(-)  
前例に類する。
- 第26例 樋木 (發病後30日目)(-)  
實質の變性は前例より稍強いが光輝細胞は認められない。
- 第27例 石村 (發病後13日目)(-)  
實質の變性と鬱血稍強い。光輝細胞は見出

されない。

### 總括及び結論

腸チフス屍の肝臓で興味あることは間質の比較的太い動静脈壁の滑平筋纖維から光輝細胞の發生する事である。中膜組織は粗糲化して一部の筋纖維は短縮して紡錘形となり筋原纖維は不明瞭となり核は橢圓形に濃縮される、かかる筋細胞は周囲の組織から狭い間隙を以て明瞭に境され漸次流線型又は橢圓形の胞體を形成して光輝細胞となる。その際筋漿の一部は斷裂現象で切り捨てられる場合も認められる。中膜に發生した光輝細胞は中膜に橢圓の間隙を残して移動して居るものもあるが長くその場所に止まるものが多い。太い静脈壁に形成される光輝細胞は周囲の組織との間に造られる間隙が著しくないので餘り目立たない事が多い。尙肝臓實質中に形成されるチフス結節の形成には光輝細胞は参照しない。

### 第2章 脾臓の光輝細胞

脾臓實質に光輝細胞の發生する事はないが、その被膜及び間質には常に少數の同細胞が散在する<sup>5)</sup>。之は脾臓自身に屬するものと見るよりは光輝細胞に富む腹膜結締織に由來するものと考へられるものである。その他上腸間膜動静脈周囲の結締織中にも少數の光輝細胞が認められる。今回検索し得た腸チフス屍の脾臓に於ける光輝細胞の消長は次の如くである。

### 實驗成績

#### 第1例 米田 (發病後6日目)(+)

脾間質には少數の光輝細胞を認めるが正常時より増加して居ない。但し脾被膜中の光輝細胞は幾分増加して居る。

#### 第2例 島倉 (發病後9日目)(+)

間質の光輝細胞には大きな變りはないが上腸間膜静脈の中膜に甚だ稀であるが若い光輝細胞を認めた。

#### 第3例 西村 (發病後12日目)(+)

特筆する様な變化はない。

#### 第4例 山口 (發病後13日目)(+)

間質の血管及び輸送管周囲の緻密な組織内に紡錘形、梨子狀形をなした光輝細胞が可成り多數に見られ、索狀をなした筋纖維からの移行形を思はれるものも検出された。

#### 第5例 深田 (發病後14日目)

死後變化強くて詳細不明である。

#### 第6例 熊田 (發病後16日目)(+)

間質に大小の光輝細胞が一部は散在性に又一部は群在性に可成り多數に増殖して居る。併し他の遊走細胞は甚だ少數である。

#### 第7例 丸尾 (發病後17日目)(+)

後腹膜組織の一部と思はれる被膜の一部には著明な光輝細胞の増殖を認める。一般間質には大きい變化は認められない。

#### 第8例 山本 (發病後18日目)(+)

間質2は少數の光輝細胞を認め肥胖細胞型のものも太い間質中に散見する。

#### 第9例 漆間 (發病後18日目)(+)

特筆する様な所見はない。

#### 第10例 小檜山 (發病後19日目)(+)

#### 第11例 渡邊 (發病後19日目)(+)

#### 第12例 森木 (發病後19日目)(+)

#### 第13例 鈴木 (發病後19日目)(+)

被膜及び間質共に光輝細胞は増殖し間質の所々には軽い炎症を伴ひ腫大した組織球、單核球の集積を認める。

#### 第14例 春本 (發病後20日目)(+)

特筆する様な所見はない。

#### 第15例 鈴木 (發病後日數不詳)(+)

間質には中等數の淋巴球、單核球の浸潤あり、その部に多數の腫大した光輝細胞を認める。その一部のものは嗜酸性の第2特殊顆粒を認める。

#### 第16例 應森 (發病後21日目)(+)

特筆する様な所見はない。

#### 第17例 河野 (發病後21日目)(+)

上腸間膜静脈の中膜組織が粗糲化して少數の筋纖維は周囲の組織から明瞭に境された類圓形の光輝細胞と化して居る。尙間質結締織内にも少數の光輝細胞が散在して居る。

## 第18例 山田 (発病後25日目)(++)

間質に少数のリンパ球, 単核球の増殖があり, 光輝細胞の増殖が認められその一部のもの腫大して居る.

## 第19例 村上 (発病後27日目)(+)

特筆する様な所見はない.

## 第20例 三浦 (発病後35日目)(++)

間質の一部にリンパ球の浸潤があり, 光輝細胞の増殖が認められる.

## 第21例 冷水 (発病後日数不詳)(+)

間質の光輝細胞幾分増殖したかに見える所がある.

## 第22例 植木 (発病後30日目)(+)

大血管の中膜は粗糲化して居るが光輝細胞の形成は認められない.

## 總括及び結論

腸チフス屍の脾臓では明かに間質及び被膜に於て光輝細胞の増殖が認められる. 定型的な増殖は病期の比較的初期に起るが, 末期でも間質に軽い炎症を伴ふ時には光輝細胞が増殖する様である. 太い血管や脾管の周囲では緻密な結締織内に遊離して存する滑平筋繊維が光輝細胞に移行する像が認められた. 即ち筋繊維は短縮して紡錘形を呈して筋繊維の尖端は断裂して漸次橢圓形の遊離細胞になる.

拙筆するに當り親しく御指導御校閲を賜つた恩師濱崎教授に深甚の謝意を表する.

## 主要文献

(第4篇参照のこと)

## 腸チフス屍の諸臓器に於ける光輝細胞の消長に就て

### 第4篇 肺臓, 腎臓及び副腎の光輝細胞

岡山醫科大學病理學教室 (指導 濱崎教授)

専攻生 岸 本 正 義

(昭和24年5月18日受稿)

## 第1章 肺臓の光輝細胞

肺に於ては正常時間質血管の外膜部及び氣管枝周囲の滑平筋から少数の光輝細胞が発生する<sup>1)</sup>. 系統的研究はまだ發表されて居ないが肺に起る諸種の慢性炎症の際には之等の部位に光輝細胞の増殖するのが認められ, 殊に氣管枝周囲で目立つ事がある. 私の今回取扱つたチフスの材料では次の様な成績を得た.

## 實驗成績

## 第1例 米田 (発病後6日目)(+)

間質の大きい血管の周囲に光輝細胞を少数に認める. その過半数に第2特殊顆粒を有する.

## 第2例 島倉 (発病後9日目)(+)

前例より光輝細胞は少数である.

## 第3例 西村 (発病後12日目)(+)

前例に類する.

## 第4例 山口 (発病後13日目)(++)

大きい血管の周囲には少数又は中等度の光輝細胞の増殖が認められる.

## 第5例 深田 (発病後14日目)(+)

大きい血管の周囲に少数の光輝細胞が認められる.

## 第6例 熊田 (発病後16日目)(+)

## 第7例 丸尾 (発病後17日目)

増殖性結核あるため除外する.

## 第8例 山本 (発病後18日目)(+)

## 第9例 笹山 (発病後18日目)(+)

## 第10例 漆間 (発病後18日目)(+)

間質に少数の光輝細胞を認める. 然し數の上から云ふと正常時以上に増して居ないが大